

思考の論理・思想の論理を獲得する読みの学習

—— 説明文教材を例に ——

信木伸一

1. 思考の論理・思想の論理

本稿は、「ものの方や考え方」と呼ばれているものの扱い方を検討するものである。「ものの方や考え方」という言葉が指すことがらは、どういう次元で問題にするのかによって、相が異なってくる。

「この文章は何が言いたいのか」という時の書き手の意見・主張は、思考活動の結果としての産物と言えるだろうが、それとは別に、思考活動の過程にどんなしくみが働いているのかに注目するならば、書き手がものを考えたり感じたりしているときに使用している社会的・文化的な認識のやり方・知の枠組みや科学的な思考のやり方などといったものが想定できるだろう。認識のやり方・知の枠組みというものは、他に転移^{注1}（応用）できるといふ点からすれば、そこにやり方のパターンがあるのであり、そのパターンを「論理」と捉えることができるだろう。中学校や高等学校の国語の授業において「論理」ということを焦点化する場合、一般には序論―本論―結論のような表現のすじみちつまり叙述の論理が対象となることが多い。

ここではそれとは別に、認識・思考を“システム”と見て、これが作動した際に生成される構造にも「論理」を想定しようと考えているのである。

「ものの方や考え方」を獲得するということを学力として見るならば、それは、認識のやり方・知の枠組みが自分のテキストとして変形しつつ編み込まれ、自身の思考や表現として活かせるということになるだろう。学習指導要領においても「ものの方や考え方」の獲得ということが言われている。使われる箇所で意味合いに幅があるが、おおむね認識の深化・拡充ということが目指されている。学習指導要領における「ものの方や考え方」の扱い方についての詳細な検討は紙幅の都合で省くが、二つのことを問題にしておきたい。一つは、「文章に表れている」とされる「ものの方や考え方」の獲得が、文章を読んでどういうことが書いてあったのかという程度の「内容」が把握できたり、どういふ話の展開で述べられていたかという文章構成が把握できたりすれば自然と成立すると考えて良いかということ。「ものの方や考え方」のやり方そのものを自分のテキストとして編み込むということは認識の形成であるから、それ

相応のプロセスがあり、それができることはことばの技能である。

もう一つの問題は、「ものの見方や考え方」という言葉が、書き手の結論や主張そのものとはほぼ同義にとらえられてしまうと、発想や思考の方法、また「そう感じられてしまう、そう見えてしまう、そう考えてしまう」という認識のやり方を問題化・焦点化できないのではないかということである。

難波博孝(1999)^{注2}は、テキストのマクロ構造に顕在的なものと潜在的なものがあるとし、前者に文章構成、後者に思考構造をあてている。この整理を踏まえつつ、潜在的なマクロ構造の範疇の中にもう一つの相、例えば「人間観」「自然観」「価値観」と呼べるような社会的・文化的な認識パターンを、「思想の構造」として仮構しておきたい。オートポイエーシス論^{注3}に則して言えば、実際の認識・思考システムが作動した結果、形成されたすじみちのパターンが「構造」^{注4}である。「論理」とは、このすじみちに他ならない。潜在的なマクロ構造である文章構成(展開)には「叙述の論理」があり、潜在的なマクロ構造の内、科学的認識の方法のような思考構造(思考のやり方・思考パターン)には「思考の論理」があり、思想構造には「思想の論理」があると考えるわけである。本稿のねらいは、国語の学習でこうした各レベルの「論理」を扱うこと、特に「思想の論理」までを視野に加えることについて展望することである。

「思想の論理」は、これまで教材の「内容」とされてきたものの内に含まれているのだろうか。しかし、そもそも「内容」と呼んでいるものには、どのような内実が措定されているのだろうか？それを漠然としたイメージで捉えているうちは、何についてどういうことが

述べられていたのかという程度のことしか指し得ないのではないだろうか。文章構成や段落毎の要旨、結論の要旨が把握できるということだけで手に入るものは、そのようなあらず。概要としての「内容」ではないだろうか。潜在的な論理を読み取るためには、それにふさわしい読みのやり方を技能として教える必要があるだろう。生きて働く言語技術には、潜在的な思想の論理を読み取る力が含まれているはずである。以上の点からすれば、教材を表現方法と内容の二分法でとらえるような授業観は、言語運用の技能と教材の内容を断絶する点で粗すぎるだろう。「思想の論理」は、社会に存在するものの見方・考え方のパターンであり、ある文章を読んでこれを獲得することは、他の文章を理解する際や自分の意見を書く際の手持ちの枠組みともなる。読書量の増大が読むことや書くことの技能の高さにつながるという経験則は、この枠組みを手に入れるという側面も大きいのではないだろうか。

2. 説明文教材の思考の論理、思想の論理

今回、説明文教材を取り上げるのは、論理ということが学習の対象となる教材ジャンルであること、一方で叙述の論理と思考の論理・思想の論理との整理がつきにくいと考えられることによる。次は、松沢哲郎「文化を伝えるチンパンジー」(光村図書「国語2」)を例として、思考の論理と思想の論理を抽出し、読みの手立てを考察したものである。

(1)「文化を伝えるチンパンジー」の叙述の論理と思考の論理
 思考の論理は、この教材においては科学的思考の方法となつてい
 る。思考の論理は、説明の手順＝文章構成とは別次元のものである
 が、説明文教材では、論理的思考の手順に沿った展開で表現されて
 いることが多い。

次の表は、文章の叙述の論理とそこに行われている思考（発想）
 の論理を整理したものである。「各段の要旨と叙述の展開」の段は、
 どのような情報がどのような展開で述べられているかを記した。「思
 考（発想）の論理」の段は、思考がどんなやり方でなされているか
 についての気づきを記した。なお、「思考（発想）の論理」の段には、
 読みの手立てを補足している。（※表中の○数字は形式段落の番号。なお、
 書き手はチンパンジーを「一人」「二人」と数え、「男性」「女性」とよぶ）

各段の要旨と叙述の論理	思考（発想）の論理
序論①～⑥段 読者の興味付け と最終的に到達したい問題の提 示 ①チンパンジーが賢いサルだ と思つている人も多い。 「読者の一般的な理解を示す ことで、そうではないのかと いう疑問／興味を喚起」 ②チンパンジーはサルより人 に近いというのが私の結論。 「研究者としての意見」 ③確かにサル、チンパンジー、	A. 自らの行為する意味 自らの研究という行為、この文 章を書くという行為の意味、意 義、価値を現前化させる。 ⑤我々人類は、どこから来た のだろう。」という疑問から、 わたしは人間の起源というも のに強い興味をもち、チンパ ンジーの研究を続けてきた。 ⑥：とすれば、人間の文化の 起源を調べるには、チンパン ジーの行動を調べるのが有効

人も霊長類という仲間である。
 「予想される読者の反応への
 応答」

④チンパンジーがサルよりも
 人に近いということの外形的
 特徴とDNA研究からの裏付
 け。「外部の知見を根拠に」

⑤チンパンジーとヒトは共通
 の祖先から受け継いだ性質を
 持つていると考えられるので、
 人類の起源を知るためにチン
 パンジー研究をする。「論拠」

⑥人間の文化の起源を調べる
 には、チンパンジーの行動を
 観察することが有効。「意見」
 序論部内の論理展開は、なぜ研
 究対象がチンパンジーなのかを
 説得するためのもの。

だろうと考え、…
 「隠れた前提…人間の文化の起
 源を調べることには意義や価値
 がある。」

【読みの手だて】
 ・書き手の願い・ねらいは何
 か？

・書き手は、何者なのか？

B. 方法の妥当性
 「チンパンジー」を対象とする
 こと、「行動」を調査するとい
 う方法をとること。

⑥人間の心や行動、社会生活
 は、体と同じく進化の産物で
 ある。とすれば、人間の文化
 の起源を調べるには、チンパ
 ンジーの行動を調べるのが有
 効だろうと考え、私は研究に
 取り組んでいる。

「隠れた前提…人間とチンパン
 ジーは大枠で捉えれば進化の同
 一線上にある。文化の進化は体
 の進化と同様に考えて良い。つ
 まり人間の行動や社会生活は、
 チンパンジーの文化が進化した
 ものである。」

【読みの手だて】
 ・筆者がこのような方法を探る
 根拠は何か？

本論(前半) ⑦⑭段 観察から分かったチンパンジーの文化の固有性

⑦ギニアのボツソウで野生のチンパンジーの観察を続けてきた。「アウトライン提示」

⑧ボツソウのコミュニケーションでは、石器道具を使ってアブラヤシの種を割って食べるという行動が代々伝えられ、群れ全体で行われている。「観察から得た行動のデータ」事実

⑨コミュニケーションのメンバーに共有され、非遺伝的な経路で世代を越えて引き継がれる知識や技術の総体を、「文化」とよぶことにする。「文化」の定義「話題の中心となる概念の説明」

チンパンジーの石器で種を割って食べるという行動から、文化の伝達を研究する。

⑩ボツソウの森は孤立していて、そう遠くない森に別のコミュニケーションがある。「複数のコミュニケーションがあるという環境の基本データ」事実

⑪コミュニケーションAは種割り

C. 概念規定

読者をここで共通の思考の場に立たせるため、「文化」の意味付けを、「共有」と「継承」という二つの概念を使って行う。「文化」は「遺伝」と切り離してとらえるという基本姿勢も示す。これは、序論の段で述べることも可能であるが、チンパンジーの文化の具体を述べる箇所に置くことが有効だという書き手の工夫か。

⑨このように、コミュニケーションのメンバーに共有され、非遺伝的な経路で世代を越えて引き継がれる知識や技術の総体を、ここでは「文化」とよぶことにしよう。

【読みの手だて】

・話題の中心は、何についてか。中心となる用語の定義はどこに示されているか？

・その中心となる用語は、定義の中のどの部分が強調されているのか？

D. 着眼点

文化を分析・考察する際の指標として道具使用の実態に着眼。

⑧ボツソウのコミュニケーション

をしないが、コミュニケーションBとCは石器を使った種割りをする。(種割り表)「コミュニケーション」との異なる行動の観察データ」事実

⑫この一帯には、アブラヤシの他にクーラとパンダという豊富な脂肪分を持ち、栄養価も高い実がある。「種割り行動をしてもよさそうな実が存在するという環境の基本データ」事実

⑬ボツソウのチンパンジーはアブラヤシの種は割って食べるが、クーラとパンダの種は無いので食べない。Aはアブラヤシの種があるのに食べない。Bは三種ともあるのにパンダの種だけ食べない。Cはクーラとパンダの種があり、どちらも食べる。「コミュニケーション」との種割り行動の事実

⑭コミュニケーションごとに、どの種を割って食べるかということが、文化の違いとして決まっているのだと考えられる。「⑬までの観察した事実を基にチンパンジーの文化の固有

は、さまざまな道具を使うことと有名だ。その一つに石器使用がある。

【読みの手だて】

・書き手は何に注目しているか？

E. 事実認識の方法(観察)

現象を取り出すための観察という方法。観察すべき現象(石器を使用しないか食べられない種割り)を先ず設定し、他の要素を捨象する。現象がみられるかどうか(石器を使った種割りをしている行動がみられるかどうか)についてコミュニケーションごとに実態調査、また環境(何の種があるかないか)と行動(何の種を割って食べるか)についてコミュニケーションごとに実態調査。

【読みの手だて】

・具体的などのような視点(問い)をもって事実をとらえようとしたのか？ 取り上げられなかったことがあるのではないか？

F. 考察(理解)の方法

「環境」と「文化の在りかた」(行動)との関連から、構造を捉える思考。行動と環境との関

性について推論し説を立てる
＝考察」

連性が説明できないことから、「行動」の要因が「環境」由来でない（因果関係がない）という結論を導く。さらにそこから野生チンパンジーのコミュニケーションにも固有の文化があることを推論する。

【読みの手だて】

・判断の理由は何か？
・前の情報とこの情報は、どう
いう意味でつながるのか？

G・事実認識の方法（実験）

チンパンジーの文化の固有性という前段での説をもとに、継承という側面を問題にする。

⑮では、そのような文化的伝統は、どのように始まり、どのように継承されていくのだろうか。

現象を意図的に発生させて、仮説を実証する方法。

【読みの手だて】

・設定された条件（対象とするコミュニケーションの選定、実験に使う種の選定、観察の視点（九歳以上の大人に注目した点）は、どのような理由からそのようにしたのか？

本論（後半）⑮～㉒段 実験から分かった文化の伝わり方の究明

⑮文化が生まれ、伝わっていく過程を実験によって発生させ、観察することにした。

【実験の目的】

⑯ボツソウの森の中央部に種と石を置いて、石を使って種を割るかどうかを観察する。

【実験の概要】

⑰ボツソウにはないクーラとパンダの種と石を置く。「実験の概要」

⑱ボツソウのコミュニケーションの十七人のうち大人は九人。

【実験対象の基本データ】

⑲大人九名のうち八名までが

種割りをしない。「実験の結果得られたデータ＝事実」⑳種割りをする一人の女性ヨがクーラばかりを割って食べる。クーラの種が食べられると知っていなければできない行動と考えられる。「実験の結果データ＝事実と考察」

㉑パンダの種を最初から割ったものはいない。パンダの種が食べられるとは誰も知らなかったと考えられる。「実験の結果データ＝事実と考察」
㉒通常、チンパンジーのコミュニケーションでは、女性は十歳過ぎに他のコミュニケーションに移る。したがって、ヨはボツソウ出身でない可能性が高い。「外部の知見を論拠として考察」

㉓ヨがアブラヤシとクーラの種を割ってパンダの種を割らなかつた。ヨの出身地は、この条件に該当するコミュニケーションBしかないということになる。「前半の観察結果と付き合わせて考察」
㉔ヨがC出身ならパンダを割り、A出身ならクーラを割り

H・考察（理解）の方法

実験によって発生した現象から、女性チンパンジーの移動に関する既有知識を併用し、整合する構造を推論する。

【読みの手だて】

・話題外部のどんな知識（この実験と別のところで得られた知識）を使って考えたのか？
・どこからが推論なのか？それはどういう理屈なのか？

I・事実認識の方法（観察）

チンパンジーの文化が継承されるという前段までの説をもとに、継承の具体的な方法（様子）を明らかにすることを問題にする。その観点から観察を継続することによって、子供に受け継がれる瞬間を発見。さらに経年観察を続ける中で、親のすることを子が見習うという形で技術が継承していることを発見。

<p>結論⑩～⑫段 最終的に到達したい問題への見解</p> <p>⑩野生のチンパンジーには、人間と同様に、コミュニケーション「こと」に異なる文化がある。「ヒトとチンパンジーに共通する文化の固有性についての考察まとめ」</p>	<p>ないだろう。ヨは、Bで生まれ、クーラの種を割る技術を身に付け、年頃になってボツソウにやってきたと推測できる。「別の可能性の検討による考察の補強」</p> <p>⑫子供のチンパンジーがヨがクーラの種を割るのを見てまねる、種割り文化が受け継がれる瞬間の観察「観察データ＝事実」</p> <p>⑬石器使用は、子の世代に伝わる様子の観察。子供が大人たちの手本を見習うことで伝わっていく。「その後の継続的観察データ＝事実」</p> <p>⑭コミュニケーションを移動する女性が文化をほかのコミュニケーションに伝えていく過程で、固有の文化が生まれる。「本論（後半）の考察まとめ」</p>
<p>K. 自らの行為する意味</p> <p>チンパンジー研究から得られた知見を人間にも共通のこととして、人間理解への示唆としての意味、意義、価値を現前化させる。⑫段は、チンパンジーの文化から人間を含む文化一般の根源的なありようとして述べられ</p>	<p>【読みの手だて】</p> <p>・どのようにすることで結果を発見できたのか（発想のポイントは何なのか）？</p> <p>J. 考察（理解）の方法</p> <p>コミュニケーションを移動する「女性」が文化をコミュニケーションの子どもたちに伝えること（継承）、文化が伝わる過程の中で少し違う新たな文化が生まれること（固有性）という二つの考察を関連づける。</p> <p>【読みの手だて】</p> <p>・部分と部分の関係（本論前半と本論後半の関係）は、どのような理屈でつながるのか？</p>

⑭隣接する異なる文化は、互いに影響し合いながら変容していく。「ヒトとチンパンジーに共通する文化の伝播についての考察まとめ」

⑮野生のチンパンジーには、人間と同様にコミュニケーションに異なる文化がある。

⑯隣接する文化は、互いに影響し合いながら変容していくのである。

【読みの手だて】

・最初の問題と最後の結論は、どのような理屈でつながるのか？

書きながら思考の論理も変容していくものであるから、叙述の論理と思考の論理を厳密に区別することは難しい。そのことは承知の上で、読みの側から思考そのものに焦点を当てるためにあえて大づかみに言えば、叙述の論理は叙述された情報と情報の関連性であり、思考の論理は叙述を手がかりにして書き手の思考活動の一部を推論したものとなる。思考の論理には、「自らの行為する意味」「方法の妥当性」で示したように、書き手の欲動と密接なところがある。これを問題にすることは、「書き手は何が言いたいのか」という主張や意見そのものではなく、「書き手は何をしようとしているのか」という行為を問うことになる。また、「着眼点」には、着想や発想のひらめきが見える。森田（1998）は、確認読みと評価読みの二つの読みの相を挙げているが、思考の論理が評価の対象となれば、そのような読みは、書き手と対話する読みだと言えるだろう。この教材の「事実認識の方法」や「考察（理解）の方法」は、科学的思考

の方法そのものである。この文章を教材として、「論理的な思考力」を育てようとする場合、この科学的思考の方法を身につけさせることになるだろう。

(2) 「文化を伝えるチンパンジー」の思想の論理

前節で示した「思考の論理」を書き手に採らせている文化的・社会的パターンであり知の枠組みであるのが「思想の構造」である。このように措定しているのだが、この二つを厳密に区別するのにもまた難しく、これもまた便宜上の仮構である。試みに、そのように見させ、考えさせ、感じさせる枠組みを抽出してみる。

i 当該領域の研究者としての一般読者への働きかけ
これは、何者として何者へ向けて働きかけているのかという力の方向と強さの問題である。一般に、専門家の言説は、真理を語る権威あるものと見なされやすく、根拠を検討すること無しに受け入れられやすい。教室でもそのような受容的な構えを作ってしまい易い。他にも、DNA研究や分類学など「体」を調べる研究とは別の、自らの「文化」研究からのアプローチの意味・価値の認証への働きかけがあると考えられる。

分類学上は、…(3)段落 最近のDNA研究からも、…(4)段落) 人間の心や行動、社会生活は、体と同じく進化の産物である。(6)段落)

ii 科学的思考

自説が実験によって再現可能なものであることが、科学的思考方法における正しさである。この際、他者と認識を共有するため

に一般化が行われ、固有の現象は捨棄される。また、オランウータン科のチンパンジーの行動をヒト科の人間の文化解明の視点(観測点)とするというやり方も、近い条件を備えたもので発生する現象から類推したことに蓋然性があるとみなす、自然科学で便宜的に使われる方法である。これは、書き手の目的へのアプローチの方法を批評させる学習活動を行うことで、生徒から疑問として出てくる可能性があるだろう。

科学的思考のやり方を身につけると同時に、それがどういふものかを批評する活動が考えられる。これについては、初読から適宜立ち止まりつつ、観察の視点や考察および実験のやり方を生徒に考えさせ、論理の展開を追体験させる授業展開も考えられる。同時に、図を読み取ったり、逆に図解したりするトレーニングも考えられる。

iii 関係性への注目

これは、筆者のアプローチの方法(着眼点)に関わっている。ここで取り上げられているのはチンパンジーの外形や身体の機能、石器の質などではなく、現象と現象の関係である。関係に注目して構造をとらえる思考方法である。これを生徒たちに発見させるのは難しいと思われるが、自分たちがチンパンジーを観察するとしたら何を見ることを思い付くだろうかということ想定させ、その視点が目的に有効か否かを判断させるなどの糸口が考えられるだろう。その上で、書き手の視点と比較すれば、書き手の見方の特徴があまりだせるだろう。

iv 人間中心主義的な理解の仕方

本文では動物の行動から人間の行動を理解しようとして述べているが、これは同時に、「文化」や「学習」など人間世界の観点によって、チンパンジーの行動について発見をし、人間社会になぞらえて意味づけているとも言える（このことは指導書の指導の観点にも見られる）。これは対抗する思想と比較してみれば、位相が分かりやすい。例えば、村山司「考えるイルカ」（東京書籍『新編新しい国語2』）では、「動物には動物の、ヒトにはヒトの生活（生態）に必要があつて発達した能力なりシステムがある。生態システムの異なるイルカとヒトの「賢さ」を単純に較べることは出来ない。」と、ユクスキュルの「動物は種に応じて固有の空間を生きている」という「環世界」に通じる見方・考え方が使われている。「文化を伝えるチンパンジー」では、

そこでわたしは、親しみを込めて、チンパンジーのことを「一人」「二人」と教え、また「男性」「女性」と呼ぶことにしている。（④段落）

「我々人類は、どこから来たのだろう。」という疑問から、わたしは人間の起源というものに強い興味をもち、チンパンジーの研究を続けてきた。（⑤段落）

最近取り組んでいるテーマは、人間と同様に、野生のチンパンジーにも存在するらしい文化についてである。（⑤段落）とあり、人間の行動を中心において、そこから他なる動物であるチンパンジーを理解しようとする思考のやり方が見て取れる。これら二つの異なる見方の文章を併せて教材化すれば、それぞれのものが見方・考え方・感じ方が前景化できるだろう。

本稿では具体的な学習指導案を示すに至らないが、現在のところ、思想の論理を授業で問題とするためには、

① 自らを何者として、どういう人に向けて書いているのか。（期待される読者の反応）

② 話題の中心は何か、それが何と関連づけられているか（結びつけられているか）、その際、どんな意味づけ（価値判断やもの見方の方向付け）をしているのか。

③ 書き手の視点や現象のとらえ方にはどのような特質があるのか。

④ 読者にどのようなもの見方をすることを呼びかけているのか。

といった視点を使って、生徒が批評活動を行うことが有効であると考えられている。

このような、思想レベルの論理を取り上げたい一つの理由は、このレベルでこそ、生徒自身の問題と教材の接点が生まれ、アクチュアリティが感じられるようになるのではないかと考えるからである。もう一つの理由は、思想の論理は、他の文章を理解したり思考する際の枠組みとして組み込まれるからである。例えば、表現活動における視点や発想というのは、この枠組みが転移・応用されると考えられる。

現今の問題として、新しい学習指導要領で、他教科でも言語活動が取り入れられるようになったこととの関わりについても考えておかなければならないだろう。現在、他教科の教員が国語科に期待することとしてイメージしているのは、レポートの書き方や口頭発表

の仕方などであろう。各教科における思考の方法は各教科で教えるはずである。科学的思考などは、説明文教材にも登場するが、すべての教科に関連しているだろう。とすれば、国語科における論理の学習の意味は、教材に書かれた結論を知識として獲得させることではなく、論理を理解し批評し活用する技能を訓練するところにあるのであろう。

3. 展 望

思想の論理を読むということは、説明的文章だけでなく、評論文でも、文学的文章でも同じ。今後の課題は、国語教育の中でこれまで蓄積されてきた授業実践や教材研究に即して、思考の論理・思想の論理にあたるものがどのように問題化されてきたか検討すること。個々の教材に即した具体的な授業案を提案すること。思考の論理・思想の論理を獲得する言語能力が国語の学力形成プログラムの中間のように位置づけられるのかを検討することである。

【注】

1 生徒が教科書教材で学んだ考え方の枠組みを文章を書く際に使うということが、これにあたる。エドワード・サイードは、自らの「オリエンタリズム」がフーコーのディスクールであると述べている（『オリエンタリズム』）が、これなども枠組みが転移・応用された例である。

2 「説明文テキストの顕在的構造と潜在的構造―母語教育のための

分析―」（『表現研究』第70号 1999. 10. 31）難波は、説明文の潜在的なマクロ構造として、一般―特殊型、前提―（讓歩）―持論型、問題解決型を挙げ、このうち問題解決型について科学的問題解決過程として「現象↓問題の発見↓仮説―仮説の検証↓仮説の修正↓一般化された理論（結論）」、現実的問題解決過程として「現象↓目標とのギャップ（＝問題）↓攻略点（原因）―解決策の設定」があるとしている。顕在的マクロ構造と潜在的マクロ構造の関係については、思考意識＋筆者の工夫＝文章構成としている。

3 オートポイエーシスとは、プロセスが作動することで何かモノやコトが産出し、その内のどれかを基にしつつ、さらに別のモノやコトを産出する別のプロセスが作られていく、そういった自律的に自己を作り替えていく運動のありようをとらえる概念である。

4 山下和也『オートポイエーシス論入門』（ミネルヴァ書房 2010. 1. 10）「構造という表現は、それを形成するそれぞれの構成要素が同一の構成要素と入れ替わっても、形式的な変化が生じないことを意味し、さらに、これによってオートポイエーシス・システムの自己同一も失われなく」（p. 28）

5 「説明文文章教育の目標と内容―何を、なぜ教えるのか―」（淡水社 1998. 4. 10）森田は、「どのようなことがらを取り上げているか」「どのように表現しているか」「どのような論理（関係）を創造しているか」を問題にする。「確認読みの能力」と、「なぜそのようなことがらを取り上げたか」「なぜそのように表現したか」「なぜ、そのような論理を創造し、創造したか」を問題にす

る「評価読みの能力」との二つの系の読みの能力でとらえることを提案している。

【主要参考文献】

- 難波博孝「説明文テクストの顕在的構造と潜在的構造―母語教育のための分析―」(『表現研究』第70号 1999. 10. 31)
- 難波博孝「母語教育の教育内容の妥当性の担保について」(『国語教育研究』第50号、広島大学国語教育会 2009. 3. 31)
- 森田信義『説明文文章教育の目標と内容―何を、なぜ教えるのか―』(溪水社 1998. 4. 10)
- 間瀬茂夫「説明的文章の読みにおける論証理解の協同性」(『国語教育研究』第51号、広島大学国語教育会 2010. 3. 31)
- 井上尚美編『言語論理教育の探求』(東京書籍 2000. 3. 31)
- 山下和也『オートポイエーシス論入門』(ミネルヴァ書房 2010. 1. 10)
- 山下和也『オートポイエーシスの教育』(近代文芸社 2007. 4. 20)
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説国語編』

(尾道大学)